
にわか雨

勝目博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にわか雨

【ZPDF】

Z9489D

【作者名】

勝田博

【あらすじ】

急な雨降り。雨宿り先で出合った女性は……。

その日雨が振ったのは偶然かも知れない。
今思えば、運命だったのかも知れない。

突然のにわか雨に打たれ、僕は近くの屋根に飛び込んだ。
そこは小さなお店の前。スナックらしかつた。
時間はまだ六時前。店にはシャッターが下りたままだ。

営業先から直接帰宅することになつていたが、
いきなりの雨は僕の足を止めた。

独り者の僕はハンカチなどは持つてはいない。
スーツだって二着くらいだ。肩の雫を手で払いながら
僕は忌々しい空を睨んだ。

「まったく、あと十分我慢しろよな」

十分あれば駅まで着けただろう。そう思いつと憎らしくてつい毒づいた。

「あらあら、大変ね」

不意に近くで声がした。

若い女性が僕の脇に立つていたのだ。僕は知り合いかと思い、
顔を覗き込んだが、見た事もない女性、しかもかなりの美人だった。
しかし、だからと言って笑うわけにはいかない。

「そうですね。忌々しい雨です。で、何か」

僕は自分で馬鹿な質問だと思ったが、口から出た言葉を戻すこと
はできない。

「『めんなさい。お店を開けたいの』

僕はシャッターの前に陣取つていたことに気が付いた。

「あー。これは失礼しました。どうぞ、どうぞ」

僕は慌ててシャッターの前から立ち退いた。

すると屋根から滴り落ちる雨水に頭から突っ込んでしまった。

「ひやー、冷たい」

恥ずかしげもなくとんでもない声を出してしまった。

女性はクスクスと笑い、シャッターに鍵を差し込んだ。

僕は諦めて立ち去ろうとしたが、シャッターはすんなりとは持ち上がらないようで、女性は四苦八苦していた。

「手伝いましょうか

と、僕はシャッターに手を掛けた。

「ありがとうございます。もう、古くて……」

勢い良く持ち上げると、せん然だ金属音とともにシャッターは持ち上がりつた。

「じゃあ、頑張ってください」

変な挨拶だが、そう言つて僕は駅に向かつて雨の中を歩き出した。

「ちょっと待つてください」

その女性は店内に入り、直ぐに傘とタオルを差し出してくれた。

「忘れ物だけど、長くこと置きっぱなしなの。良かつたら使ってください」

「ありがとうございます。遠慮なく使わせていただきます。今度持つてきますね」

そう言つて僕は傘を受け取り、タオルで頭と肩をふき取りお礼を言つて、

駅へと向かつて歩き出した。

女性の顔が視界の片隅に入つていて、僕は振り返らずに歩き続けた。

本当なら一一杯飲みたいと思つた。それほど美しい女性だったからだ。

しかし僕の財布は給料前、ヒラヒラ一枚しか残つていなかつた。あと三日。どうやって過ごすかを考えていたのだ。

アパートで傘をたたむ時、ふとその傘に名札が付いていたことに気が

が付いた。

名札があるなら届ければ良いものを……などと考えながら見てみると、

僕は驚きで一瞬固まつた。

親父と同姓同名。男手一つで僕を育てた親父の名前だ。かと言つて良くある名前でもない。

不意に一年前に死んだ親父が、蘇つた気がした。

僕は給料日が待ち遠しかつた。

就業後直ぐに銀行に駆けつけ、自動支払機から五万ほど引き下ろし、傘を持つてあの店にやつて來た。

既にシャツスターは開かれ、小さな看板が表に出ていた。

「こんばんは」

僕はゆっくりと扉を開けた。

「いらっしゃいませ」

あのときの女性が、カウンターの中でグラスを拭いていた。

「あら、雨に日の……」

どうやら覚えていてくれたらし!。

「あの、これ。お返しに上がりました」

そう言って僕は傘を差し出した。

「気にしなくても良かつたのに……」

「飲んでいいとも構わないですか」

そのつもりで来たのだが、断るのが礼儀とさえ思えた。

「もちろん、飲み屋ですもの」

そういう笑つた顔も一際美しく見えた。

二杯目のウイスキーを開けた時、僕は傘の名前について聞いてみた。

「さあ、このお店は、母のお店だったの。でも、去年死んで……」

女性は一瞬うつむき掛けた。

「そうですか。ごめんなさい思い出させてしまつて」

「良いんです。でも、閉めてしまつと、母との繋がりが消えるよつて
〇しを辞めて店を引き継いだの」

女性は懐かしそうに店内を見回した。まるでそこには自分の母親がいるかのように。

「やうだつたんですか」

どうりで水商売らしくない女性だと思つたわけだ。

「ちょっと待つてね」

そう言うと女性は古いファイルを取り出した。

それは名詞ホルダー。

「有るかもしれないわね」

そして女性が探し当て私に見せた名刺。それは紛れもなく親父の名刺だった。

僕はホルダーから取り出した。まさかこんな所で、親父に出来つとは想像すらしなかった。

何気なくその名詞を裏返したとき、僕は驚きの声を上げそうになつた。

そこには女性の字で、（一番好きな人）そしてハートマークが残されていた。

僕は名刺を女性に渡した。女性も名刺を見て驚きの表情を浮かべた。無口だつた親父。余分なことは言わず、母も死後は笑顔も消えた親父。

その親父はこの店でどうこう風に時間を過ごしていたのだろうか。そして目の前の女性の母とは、どんな関係だったのか。そんな想いに耽つていると、

目の前の女性が右手を差し出しにっこりと笑つた。

「私、京子。よろしくね」

僕はその手をしっかりと握り締めた。

そして暖かさが身体に沁み込むのを感じた。

親父の言いたい事が、理解できた瞬間でもだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9489d/>

にわか雨

2010年11月3日14時08分発行